

お金ほど便利なものはない。大昔はモノとモノの交換が売買の基本だったが、それでは何かと不都合も起きる。社会の拡大につれ、普遍的な価値のあるモノを物品と交換する必要に迫られたのだろう。お金は素晴らしい発明品だ、と感心する。しかし定着までには様々な紆余曲折があった。

我が国でも飛鳥時代に「富本銭」が、さらに平城京遷都に際して「和同開珎」が発行されたが、民は中々「銭」を信用しようとしなかった。銭を流通させて社会経済活動を活性化するために政府がとった策は「銭で身分が得られる」という荒技だった。それなりに効果はあったようだが、「銭」への信頼は（そして「執着」も……）徐々に増していったようだ。

「お金」は実に公平な存在だ。原価とは関係なく額面はだれにも等しく保証されている。一万円は一万円分のもので交換出来る。と誰もが信じている。社会情勢によってその「一万円分の価値」は変動するが、「一万円」という絶対的な価値は変わらない。だからこそ、野放図に紙幣は発行できないし、してはいけないのだ。国家も個人もちゃんとしたお金の遣い方ができなければ大人とは言えない。



絵・江口修平

無い金は遣わない

里中満智子

高校生でプロのマンガ家としてデビューして原稿料が入ってくるようになった。私にとって（アルバイトを除いて）初めて手にした私有財産は新人賞の賞金一〇万円。昭和三十九年当時としては大きな金額だった。受け取った際に「源泉所得税」が差し引かれていることを知り、「収入イコール資産と思っただけで浮かれている」と自分に言い聞かせた。言い聞かせ続けて今に至る。

欲しいものは当然山のようにあるが、「無い金」では買わない。持ってもいない金があるかのように遣うのは恐ろしいと、私は思っている。自分自身の安心のためにも常に持っている金の範囲内でものを買ってきた。

だから私は不動産を買う時でもローンは組まずにその都度すべてキャッシュで手に入れてきた。人には色々考え方もあるし、ローンを組む人の言い分も分かるが、私は気が小さいのでローンなど組んだら「もし万一の事があつたら払えなくなるかも」と不安でいたたまれなくなるだろう。小心ゆえに借金知らずで生きてきて、そのおかげと言っただけだが、いつ死んでも金のことでは誰にも迷惑をかけないで済む。金以外の事は、死んでみなくては分からないが……。

さとなか・まちこ●マンガ家。1948年大阪生まれ。1964年（高校2年生）に「ピアの肖像」で第1回講談社新人漫画賞受賞。代表作に「あした輝く」「アリエスの乙女たち」「海のオーロラ」「あすなる坂」「狩人の星座」「天上の虹」など多数。2006年に全作品及び文化活動に対し文部科学大臣賞受賞。2010年文化庁長官表彰受賞、2013年度「マンガ古典文学 古事記」古事記出版大賞太安万侶賞受賞。公益社団法人日本漫画家協会常務理事／マンガジャパン代表／NPO アジア MANGA サミット運営本部代表／大阪芸術大学キャラクター造形学科学科長など。

